電気通信大学紀要 34 巻第 1 号 pp.39-47（340106）〔論文〕

入学者選抜の改革とアンケート調査
―卒業研究指導教員への学生評価に関する調査の比較分析を中心に―

山路浩夫，湯山加奈子，三宅貴也，中村裕樹，和田光司

University Entrance Examination Reforms and Research Surveys
―focusing on comparative analysis of the research surveys on the UEC students by their laboratory supervisors―

Hiroo YAMAJI, Kanako YUYAMA, Takaya MIYAKE, Hiroki NAKAMURA, Koji WADA

要旨

高大接続・入学者選抜の改革において、各大学の個別選抜が担う役割への期待は大きい。

本学においても、入学者選抜、教育に係る改革が続けられてきた。本稿では、アドミッションセンターが各教員の協力を得て実施した学士４年次の学生評価アンケート調査のうち、2014 年度から 2017 年度の入学者に関する調査結果を比較検討し、近年における改革の節目となった 2016 年度改組の前後を通じて、本学の入学者選抜が多様な学生確保に機能してきた状況を明らかにした。

キーワード：高大接続改革、大学入学者選抜、アンケート調査、追跡調査

Abstract

In respect of the Integrated Reforms in High School and University Education and University Entrance Examination, universities own entrance examinations are expected to play further key roles to carry out the ongoing reforms. The University of Electro-Communications (UEC) has been implementing enhancement of the systems of prospective students selection and following academic education. In this study, we conducted comparative analysis of the surveys on the UEC students who enrolled in the period from 2014 through 2017 by their laboratory supervisors. Our study indicated that the entrance examination system of our university worked properly to obtain diversified human resources before and after the UEC reform in 2016.

Key words : reforms of high school and university articulation system, university entrance examination, research surveys on the UEC students by their laboratory supervisors, follow-up studies

１．はじめに

2021年度大学入学者選抜より、大学入試センター試験に代わって大学入学共通テストが導入され、各大学の個別試験も新たな区分で実施された。2012年８月、中央教育審議会に高大接続改革が諮問されてより、紆余曲折を経た高大接続改革のもとでの新たな入学者選抜であり、また、新型コロナウイルス感染症への強い警戒が続く中での選抜実施となった。

大学入学共通テストでは、思考力等を重視する出題へと見直しが図られる一方で、記述式問題の導入や英語４技能評価のための民間の資格・検定試験の活用は見送ら

Received on September 6, 2021.
アドミッションセンター

れることとなった。

記述式問題の出題や総合的な英語力の育成・評価のあり方については、高等学校の新学習指導要領に対応した大学入学共通テストの科目構成等とともに、「大学入試のあり方に関する検討会議」において検討が行われ、2021年７月に「提言」がとりまとめられた。[1]

同提言は、大学入学者選抜の改善に関して、「異なる選抜区分が持つ意義や特性、大学入学共通テストと個別試験との関係や大学入学者選抜と入学後の教育との役割分担の視点を踏まえた検討を行う必要がある。また、各大学においては、各々の入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、異なる選抜区分の望ましい組合せの追求や入学者選抜で問うべきことと入学後の初年次教育等で育成すべきことの仕分等について検討していくことが求められる。」としている。[1]

また、高大接続改革を支える多面的・総合的評価の推進に関しては、具体的な評価の内容や手法、新学習指導要領のもとでの調査書のあり方等について、「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」において検討が進められ、2021年３月に「審議のまとめ」が取りまとめられた。[2]

2022年度以降の大学入学者選抜と向き合っていく上で、上記「提言」や「審議のまとめ」等からも、役割分担を促しつつ、とりわけ各大学の個別試験の果たす役割への期待がうかがわれる。[1][2][3]

電気通信大学（以下、本学）は、かねてより、教育、入学者選抜の改善を重ねてきた。2016年度の改組では、学士課程を、４学科体制から、３つの類および14の教育プログラムによる体制へと再編し、入学者が、段階的・探求的に専門性を高める体制を整備した。また、これに対応して入学者選抜の見直しを行い、一般入試前期日程は学域一括での募集、後期日程は類別での募集とした。

国立大学第３期中期目標・計画期間の初年度にあたる2016年度の改組は、本学にとって、高大接続改革を先取りする個別選抜改革としても重要な意義を持つ。そのため、アドミッションセンターでは、改組以降、志願倍率面からみた学生募集が堅調かつ安定的に推移する傍らで、大学入学以降も広く見据えて追跡調査の拡充を図り、入学者選抜の機能状況について検証を続けてきた。

特に近年は、変革の進む社会を主体的に生き抜くことのできる人材の育成に注目が集まる中、入試結果や学業成績（GPA）のみでは測りきれない能力・資質を把握し、入学者選抜の改善に活かすことにも取組んできた。主なものとしては、各研究室教員の協力を得て実施する、学士４年次の学生評価に関するアンケート調査がある。この調査は、研究に向かう姿勢、主体性・問題解決力、コミュニケーション力等、幅広い能力を対象としている。

アンケート等を活用した追跡調査については、先行研究でも様々な形で取り上げられてきた。近時では、井ノ上、山下、大友、川嶋（2021）は、卒業時の教員及び学生アンケート、入学時アンケートおよびGPAを統合的に分析・検討し、多面的・総合的入学者選抜の効果検証を行っている。[4]

本学においても、前述のアンケート調査を毎年実施している。2021年２月の電気通信大学紀要（第33巻第１号）では、改組初年度にあたる2016年度の入学者に関する調査結果を取り上げ、学生の多様な能力の把握や入学者選抜の機能状況について報告した。（以下、前稿報告）。[5]

本稿では、最新の調査である2017年度入学者の調査結果を報告するとともに、第３期中期目標・計画期間の最終年度に際して、前稿報告を発展させて、改組前後の４年間の調査結果を総合的に比較分析する。改組前後における学生の特性や課題を明らかにすることを通じて、本学の入学者選抜が学生確保に果たしてきた役割について考えてみたい。

２．卒業研究指導教員への学生評価アンケート調査

２-１．学生評価アンケート調査の概要

近年、アドミッションセンターでは、毎年、研究室の指導教員に対して、学士４年次の学生を評価するアンケート調査を実施してきた。また、修士（博士前期課程）を修了する学生も調査しているが、本稿では、高大接続との関連に鑑みて、学士４年次の学生（昼間コース）の調査結果のみを取り上げる。具体的には、2014年度から2017年度の各年度に学士課程に入学した学生で、標準修業年限（４年間）で卒業に至った学生のみを対象とする。

2014、2015年度の入学者は、2016年度改組以前の情報理工学部を構成する４つの学科のいずれかで、また、2016、2017年度の入学者は、改組後の情報理工学域を構成する３つの類のいずれかで、それぞれ修学している。

アンケート調査は、後述する設問内容と回答方法で実施した。2016年度入学者までは、アンケート用紙を、教員が所属する各専攻事務室を通じて配付・回収する形で、また、2017年度入学者分は、Google フォームを用いて直接教員に依頼する形で実施した。実施時期は、学生の卒業後、新年度の第１四半期にかけての時期である。アンケート調査の趣旨を周知するため、事前に、研究科長、各専攻長等を通じて関係者への協力依頼も実施した。

調査内容は後述の７項目である。アンケートの回答結果は統計的に処理し、特定の個人が識別されない形で追跡調査に用いている。

２-２．調査内容と回答方法（評価尺度）

調査の内容と評価尺度は、各々Table１、Table２の

通りである。回答方法は、各設問項目について、同意するか否かの程度に応じて５段階での評価を依頼した。

Table１．教員による学生評価アンケート設問項目

No	設問項目	設問内容
〔1〕	真面目さ	学業に取組む姿勢は好ましいか
〔2〕	学術成績	学術的に優秀であるか
〔3〕	社会性	学業以外の活動への取組みは好ましいか
〔4〕	研究面での コミュニケーション力	周囲の学生、教員、共同研究関係者等との関わりは好ましいか
〔5〕	主体性・問題解決力	新たな課題や不測の事態に対して、主体的に解決・克服する能力が高いか
〔6〕	期待性	将来は社会に出て有為な存在になると、期待させるものがあるか
〔7〕	総合力	総合的に評価して優秀な人材であるか

Table２．教員による学生評価アンケートの評価尺度

評価 尺度	強く 不同意	不同意	どちらで もない	同意	強く同意
評点	1	2	3	4	5

３．　学生評価アンケート調査の結果

３-１．アンケート調査への回答状況

アンケート調査への回答状況をTable３に示す。回答を得た評価対象の学生について、以下で分析考察を行う。

Table３．指導教員からの回答率と回答を得た対象の学生数（留学生込み）

	2014入学	2015入学	2016入学	2017入学
指導教員からの アンケート回答率	90.0%	78.7%	75.2%	76.0%
回答を得た評価 対象の学生数	501名	420名	402名	399名

３-２．調査結果の概要

各年度における調査結果の概要として、各設問項目の評価の平均値をTable４に示す。これをグラフ化したものがFigure１である。

各項目ともに概ね4.0前後の水準にあり、後述のように、５（最も肯定的な評価）、もしくは４（５に次ぐ肯定的評価）の評価を得た学生が多いことを反映している。

特に、改組初年度の2016年度は、いずれの項目においても、他の年度の評価を上回っている。

項目別では、各年度を通して、「真面目さ」と「研究面でのコミュニケーション力」の平均値が4.1～4.3近傍の水準となっており、相対的に評価が高い。また、「期待性」、「総合力」についても、総じて高めである。

改組により、学生募集の括りの多様化や、段階的・探求的に専門性を高める体制の整備が図られる一方で、改組前後を通じて、入学者は、「真面目さ」、「研究面でのコミュニケーション力」、「総合力」等をしっかりと身につけ、卒業に至っていることがわかる。

一方、課題としては、「主体性・問題解決力」の評価が、改組の前後を通じて低く、各年度ともに4.0を下回っている。高大接続改革においても、課題発見・解決能力等の強化が求められており、今後の社会を担う若年世代の課題を、本学学生の中にも見出すことができる。

Table４．年度別・項目別の評価の平均値

	2014入学	2015入学	2016入学	2017入学
真面目さ	4.09	4.12	4.28	4.18
学術成績	3.85	3.92	4.02	3.91
社会性	3.85	3.85	4.06	3.86
研究面での コミュニケーション力	4.11	4.13	4.21	4.07
主体性・問題解決力	3.70	3.73	3.91	3.74
期待性	4.04	4.03	4.19	4.01
総合力	4.04	4.07	4.17	4.03

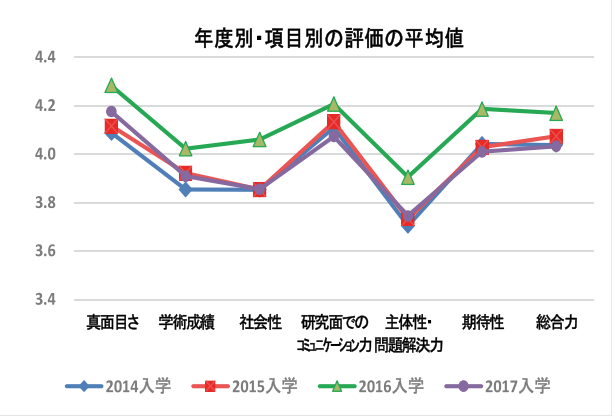

Figure１．年度別・項目別の評価の平均値

３-３．項目別、評価段階別の結果・分布状況

各年度の調査結果の詳細は、Table５の通りである。

７項目のうち、「真面目さ」、「学術成績」、「研究面でのコミュニケーション力」、「期待性」、「総合力」の５項目については、いずれの年度も、５ないし４の評価を受けた学生が最も多い。特に、「真面目さ」と「研究面でのコミュニケーション力」は、４以上の評価が全体の８割前後かそれ以上と、高くなっている。

他方で、「社会性」（学業以外の活動への取組み）と「主体性・問題解決力」については、いずれの年度も４の評価を受けた学生の割合が最も多く、2016年度を除くと、次いで３の評価を受けた学生の割合が多い。特に、「主体性・問題解決力」は、評価４以上の割合がいずれの年度も６割台に留まっており、本学学生の課題である。

Table５．調査結果の詳細（評価段階別にみた学生割合）

項目	評価段階（評点）	2014入学	2015入学	2016入学	2017入学
真面目さ	5	38.5%	42.4%	50.0%	39.9%
	4	40.3%	35.7%	33.8%	43.2%
	3	14.0%	14.0%	11.2%	12.3%
	2	5.8%	6.9%	4.5%	3.5%
	1	1.4%	1.0%	0.5%	1.0%
学術成績	5	29.7%	31.9%	32.8%	25.6%
	4	36.5%	37.1%	41.8%	46.5%
	3	25.5%	23.3%	20.6%	22.1%
	2	5.8%	6.4%	4.2%	4.8%
	1	2.4%	1.2%	0.5%	1.0%
社会性	5	24.4%	25.7%	34.8%	22.8%
	4	40.3%	37.9%	37.6%	42.9%
	3	31.9%	32.9%	26.6%	31.7%
	2	3.0%	3.4%	0.8%	2.0%
	1	0.4%	0.2%	0.3%	0.5%
研究面でのコミュニケーション力	5	37.5%	37.4%	41.6%	32.1%
	4	42.5%	43.8%	40.4%	49.2%
	3	15.2%	14.3%	16.0%	13.6%
	2	3.0%	3.8%	1.0%	4.0%
	1	1.8%	0.7%	1.0%	1.0%
主体性・問題解決力	5	23.0%	25.5%	30.6%	20.5%
	4	37.7%	35.2%	36.8%	44.7%
	3	28.7%	27.6%	26.1%	25.8%
	2	8.0%	10.5%	5.5%	7.1%
	1	2.6%	1.2%	1.0%	2.0%
期待性	5	34.7%	34.8%	42.5%	28.4%
	4	40.7%	38.8%	36.1%	48.9%
	3	20.2%	21.9%	18.9%	18.7%
	2	3.2%	3.6%	2.5%	3.5%
	1	0.8%	1.0%	0.0%	0.5%
総合力	5	35.7%	36.4%	40.0%	29.8%
	4	38.5%	39.8%	40.0%	48.4%
	3	20.6%	19.3%	16.7%	17.5%
	2	4.2%	3.8%	3.2%	3.8%
	1	1.0%	0.7%	0.0%	0.5%

（注）各年度の各評価項目につき、占める割合の大きい上位２つの評価段階を網掛け

３−４．本学生の特性をなす項目の改組前後比較

本学生の強みである「真面目さ」と、課題性の大きい「主体性・問題解決力」について、改組前（2014、2015年度の平均値）と改組後（2016、2017年度の平均値）で比較し、示したものがFigure２、Figure３である。

Figure２は、「真面目さ」についての、評価段階別の対象者割合である。改組前、改組後の、それぞれ２年間の平均値で比較を行っている。上位の評価である評価５と４をあわせた学生数の割合は、改組前の78.5％に対して改組後が83.5％と上昇している。ただし、各評価の割合について、改組前後を比較した検定結果からは、改組前後で有意な差は認められない（有意水準５％）。

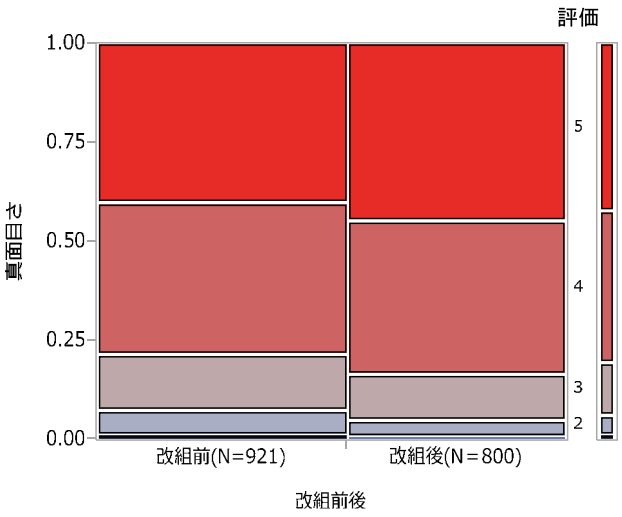

Figure２．改組前後における「真面目さ」に関する評価段階別割合（２年間の平均値による）

Figure３は、「主体性・問題解決力」に関する同様の分析である。評価５と４をあわせた学生数の割合では、改組前の60.7％に対して改組後が66.3％である。数値はやや改善しているものの、課題性をうかがわせる。各評価の割合について、改組前後を比較した検定結果からは、改組前後で有意な差は認められない（有意水準５％）。

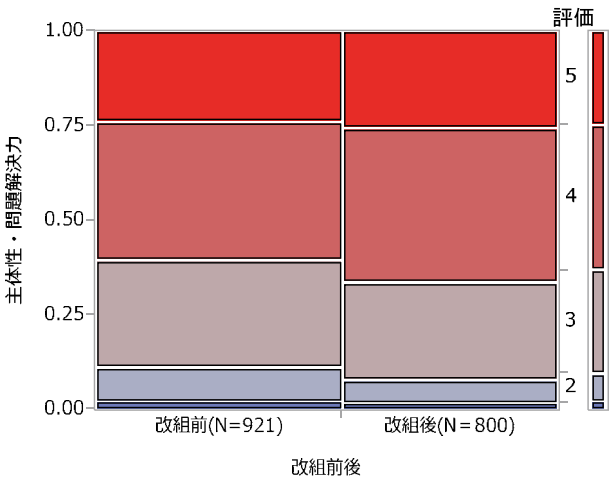

Figure３．改組前後における「主体性・問題解決力」に関する評価段階別割合（２年間の平均値による）

今後の高大接続改革への対応の中で、「主体性・問題解決力」の強化が図られることが望まれる。

３−５．学科別、類別の比較分析

学科別（改組前の2014、2015年度入学者）、類別（改組後の2016、2017年度入学者）ごとに、調査結果を比較検討する。各年度の、学科別、類別の結果を、Table６、Figure４、５、６、７に示す。

改組前（Figure４、５）は、年度により、項目により、学科ごとの平均値の大小関係が入れ替わる場合が少なく

ないのに対して、改組後（Figure６、７）では、類間の平均値の大小関係に、緩やかな傾向がみられる。もっとも、有意な差が認められるケースは限られる。

７つの評価項目について、学科別、類別の平均値の差の検定結果をTable７に示す。

改組前の2014、2015年度では、唯一、2015年度の「主体性・問題解決力」において、J学科とS学科との間で有意な差がみられる（有意水準５％）。

改組後は、2016年度に、「研究面でのコミュニケーション力」と「社会性」において、いずれも、Ⅱ類とⅢ類及びⅡ類とⅠ類との間で、また、「期待性」と「総合力」においては、いずれもⅡ類とⅠ類との間で有意な差がみられる（有意水準５％）。また、2017年度は、「主体性・問題解決力」において、Ⅱ類とⅢ類との間で有意な差がみられる（同５％）。

「主体性・問題解決力」は、本学学生全体の課題であるとともに、所属ごとの差が拡大しないかにも注視していく必要がある。

Table６．学科・類別の各設問項目の評価平均値

項目	改組前の４学科	2014入学	2015入学	改組後の３つの類	2016入学	2017入学
真面目さ	J学科	4.19	4.21	Ⅰ類	4.21	4.16
	I学科	4.11	4.18	Ⅱ類	4.37	4.21
	M学科	4.05	4.17	Ⅲ類	4.25	4.15
	S学科	4.01	3.96	―	―	―
学術成績	J学科	4.03	4.04	Ⅰ類	3.99	3.85
	I学科	3.90	3.90	Ⅱ類	4.12	3.96
	M学科	3.74	4.07	Ⅲ類	3.92	3.90
	S学科	3.77	3.77	―	―	―
社会性	J学科	3.95	3.99	Ⅰ類	3.99	3.85
	I学科	3.87	3.78	Ⅱ類	4.22	3.93
	M学科	3.73	3.82	Ⅲ類	3.92	3.74
	S学科	3.87	3.81	―	―	―
研究面でのコミュニケーション力	J学科	4.10	4.22	Ⅰ類	4.13	4.01
	I学科	4.11	4.09	Ⅱ類	4.37	4.15
	M学科	4.13	4.23	Ⅲ類	4.08	4.02
	S学科	4.10	4.05	―	―	―
主体性・問題解決力	J学科	3.88	3.94	Ⅰ類	3.85	3.67
	I学科	3.74	3.61	Ⅱ類	3.99	3.89
	M学科	3.54	3.83	Ⅲ類	3.85	3.60
	S学科	3.68	3.61	―	―	―
期待性	J学科	4.19	4.09	Ⅰ類	4.07	3.98
	I学科	4.07	3.96	Ⅱ類	4.31	4.06
	M学科	4.04	4.23	Ⅲ類	4.16	3.97
	S学科	3.94	3.92	―	―	―
総合力	J学科	4.13	4.22	Ⅰ類	4.04	3.98
	I学科	4.06	4.00	Ⅱ類	4.32	4.07
	M学科	4.04	4.17	Ⅲ類	4.10	4.04
	S学科	3.93	3.95	―	―	―

（注）J学科：総合情報学科，I学科：情報・通信工学科，M学科：知能機械工学科，S学科：先進理工学科

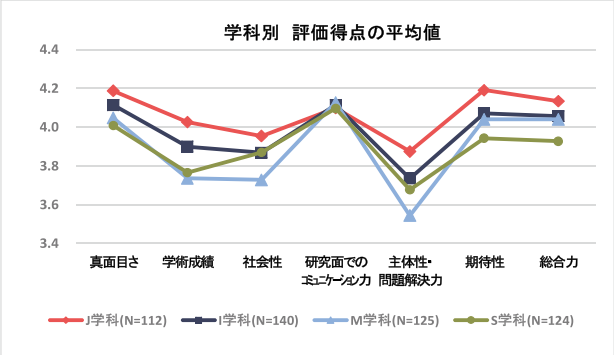

Figure４．2014年度入学者（学科別）の評価得点

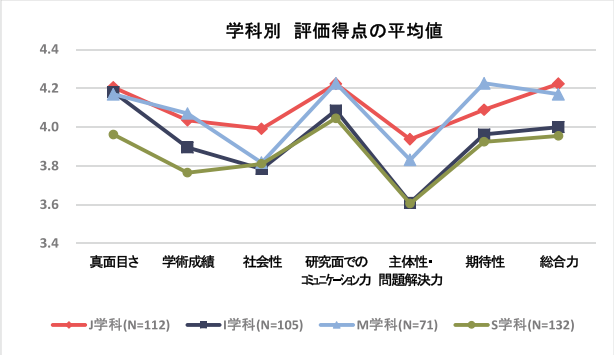

Figure５．2015年度入学者（学科別）の評価得点

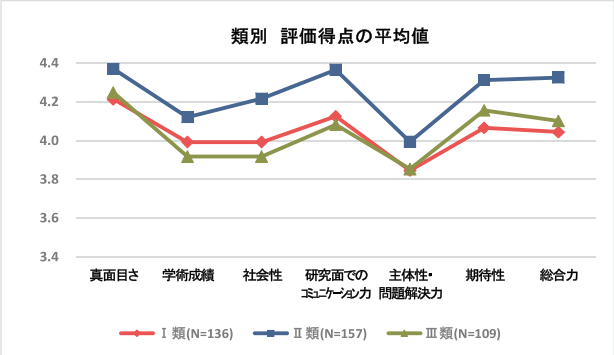

Figure６．2016年度入学者（類別）の評価得点

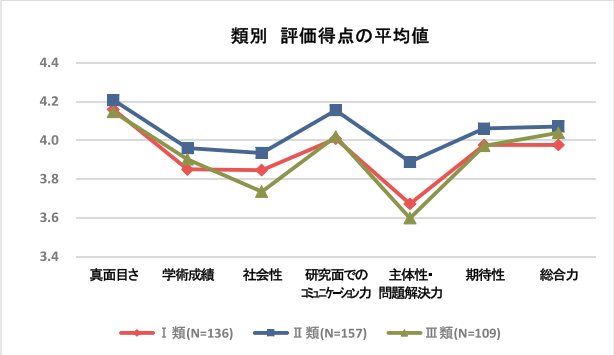

Figure７．2017年度入学者（類別）の評価得点

Table 7．学科、類間における各項目の評価得点の平均値の比較（差の検定）

対象項目と比較する学科			2014年度入学者		2015年度入学者	
項目	学科①	学科②	評価得点の平均値の差（類①－類②）	p値	評価得点の平均値の差（類①－類②）	p値
真面目さ	J	S	0.18	0.457	0.24	0.195
	J	M	0.14	0.662	0.04	0.994
	J	I	0.07	0.927	0.02	0.998
	I	S	0.11	0.794	0.22	0.297
	I	M	0.07	0.939	0.01	1.000
	M	S	0.04	0.987	0.21	0.454
学術成績	J	S	0.26	0.180	0.27	0.121
	J	M	0.29	0.108	−0.03	0.995
	J	I	0.13	0.742	0.14	0.697
	I	S	0.13	0.690	0.13	0.722
	I	M	0.16	0.531	−0.18	0.628
	M	S	−0.03	0.995	0.31	0.130
社会性	J	S	0.08	0.871	0.18	0.348
	J	M	0.23	0.163	0.17	0.529
	J	I	0.09	0.853	0.21	0.284
	I	S	0.00	1.000	−0.03	0.995
	I	M	0.14	0.524	−0.03	0.995
	M	S	−0.14	0.531	0.01	1.000
研究面でのコミュニケーション力	J	S	0.00	1.000	0.18	0.472
	J	M	−0.03	0.994	0.00	1.000
	J	I	−0.02	0.999	0.14	0.629
	I	S	0.02	0.999	0.04	0.984
	I	M	−0.01	0.999	−0.14	0.705
	M	S	0.03	0.993	0.18	0.472
主体性・問題解決力	J	S	0.20	0.418	0.33	0.046*
	J	M	0.33	0.051	0.11	0.892
	J	I	0.14	0.683	0.33	0.070
	I	S	0.06	0.964	0.00	1.000
	I	M	0.19	0.393	−0.22	0.462
	M	S	−0.13	0.711	0.22	0.409
期待性	J	S	0.25	0.129	0.17	0.472
	J	M	0.15	0.541	−0.14	0.744
	J	I	0.12	0.699	0.13	0.717
	I	S	0.13	0.627	0.04	0.988
	I	M	0.03	0.991	−0.26	0.217
	M	S	0.10	0.815	0.30	0.099
総合力	J	S	0.21	0.299	0.27	0.080
	J	M	0.09	0.856	0.05	0.977
	J	I	0.08	0.909	0.22	0.237
	I	S	0.13	0.651	0.05	0.979
	I	M	0.02	0.999	−0.17	0.589
	M	S	0.11	0.761	0.21	0.341

*赤字は 5%水準で有意

対象項目と比較する類			2016年度入学者		2017年度入学者	
項目	類①	類②	評価得点の平均値の差（類①－類②）	p値	評価得点の平均値の差（類①－類②）	p値
真面目さ	Ⅱ類	Ⅰ類	0.16	0.276	0.05	0.880
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.12	0.501	0.06	0.833
	Ⅲ類	Ⅰ類	0.03	0.949	−0.01	0.993
学術成績	Ⅱ類	Ⅰ類	0.13	0.414	0.11	0.531
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.20	0.143	0.06	0.860
	Ⅲ類	Ⅰ類	−0.08	0.777	0.05	0.892
社会性	Ⅱ類	Ⅰ類	0.22	0.050*	0.09	0.618
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.30	0.009*	0.20	0.120
	Ⅲ類	Ⅰ類	−0.08	0.752	−0.11	0.564
研究面でのコミュニケーション力	Ⅱ類	Ⅰ類	0.24	0.031*	0.15	0.305
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.28	0.014*	0.13	0.410
	Ⅲ類	Ⅰ類	−0.04	0.912	0.01	0.994
主体性・問題解決力	Ⅱ類	Ⅰ類	0.15	0.365	0.22	0.119
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.14	0.449	0.29	0.034*
	Ⅲ類	Ⅰ類	0.01	0.998	−0.07	0.820
期待性	Ⅱ類	Ⅰ類	0.25	0.029*	0.08	0.658
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.16	0.279	0.09	0.657
	Ⅲ類	Ⅰ類	0.09	0.671	−0.01	0.999
総合力	Ⅱ類	Ⅰ類	0.28	0.009*	0.09	0.590
	Ⅱ類	Ⅲ類	0.22	0.070	0.03	0.948
	Ⅲ類	Ⅰ類	0.06	0.849	0.06	0.833

*赤字は 5%水準で有意

3－6．入試区分別の比較分析

入試区分別に調査結果を比較検討する。評価が得られた入試区分別の対象学生数は、Table 8の通りである（留学生は含まず）。

入試区分別の各設問項目の評価平均値を、入学年度別に示すと、Table 9及びFigure 8、9、10、11の通りである。（以下では、対象となる学生が受験した当時の入試区分の呼称を踏まえて、一般入試前期日程、一般入試後期日程、推薦入試を、それぞれ前期、後期、推薦と称することとする。）

Table 8．入試区分別の分析対象学生数

		2014入学	2015入学	2016入学	2017入学
対象学生数		495名	411名	395名	394名
内訳	前期	320名	257名	221名	226名
	後期	133名	119名	138名	137名
	推薦	42名	35名	36名	31名

Table 9．入試区分別の各設問項目の評価平均値

項目	入試区分	2014入学	2015入学	2016入学	2017入学
真面目さ	前期	4.06	4.15	4.17	4.13
	後期	4.18	4.02	4.33	4.22
	推薦	4.12	4.17	4.67	4.32
学術成績	前期	3.77	3.88	3.90	3.88
	後期	3.98	3.95	4.15	3.93
	推薦	4.10	4.14	4.19	4.10
社会性	前期	3.81	3.83	3.99	3.87
	後期	3.89	3.81	4.12	3.83
	推薦	4.02	4.20	4.25	3.94
研究面でのコミュニケーション力	前期	4.04	4.14	4.17	4.05
	後期	4.26	4.10	4.22	4.06
	推薦	4.14	4.20	4.39	4.39
主体性・問題解決力	前期	3.62	3.72	3.80	3.73
	後期	3.82	3.70	3.99	3.74
	推薦	3.98	3.97	4.14	3.94
期待性	前期	4.00	4.01	4.10	3.99
	後期	4.20	4.01	4.23	4.04
	推薦	4.07	4.26	4.44	4.13
総合力	前期	3.97	4.07	4.08	4.03
	後期	4.16	4.03	4.24	4.03
	推薦	4.17	4.29	4.39	4.16

入試区分別にみた場合にも、全体の傾向と同様に、いずれの入試区分においても、「真面目さ」と「研究面でのコミュニケーション力」が高い傾向にあり、「主体性・問題解決力」の評価が相対的に低い。

入試区分間の比較では、2014年度は、Table 9及びFigure 8の結果から、「真面目さ」、「研究面でのコミュニケーション力」、「期待性」について、後期の評価が前期、推薦を上回っている。これに対して、2015年度以降は、Table 9及びFigure 9、10、11の結果から、推薦

入学者の評価が、各項目において、前期、後期の入学者の評価を上回っている。

平均GPA等の学業成績では、特に、入学後早期の段階において、推薦入学者の成績が、一般入試（前期、後期）による入学者の成績に比べて芳しくないとの指摘を受けることが少なくない。他方で、学業成績のみでは測りきれない多様な能力・資質を把握することの重要性が高まる中で、当該アンケート調査の範囲においては、推薦入学者が、前期、後期の入学者を上回る評価を得ている項目が多くある。

入試区分ごとの平均値の差の検定結果は、Table10の通りである。2016年度入学者では、「真面目さ」と「期待性」において推薦入学者と前期入学者との間で、また、「学術成績」において後期入学者と前期入学者との間で、それぞれ有意な差がみられた（有意水準５％）。また、2015年度においては、「社会性」（学業以外の活動への取組み）において、推薦入学者と前期入学者、推薦入学者と後期入学者との間で、それぞれ有意な差がみられた（同５％）。大学での学修や社会での活躍の基礎をなす能力や資質において、推薦入学者が前期、後期の入学者に勝るとも劣らない評価を得ている。

当該調査の対象者を標準修業年限（４年間）での卒業者に限定していることに伴う分析の限界、即ち、４年間で卒業に至らない学生の評価を反映していないことには留意を要するものの、推薦入試を通じて、学力に重きを置く一般入試とは異なる特性・強みを持つ学生を入学させ、多様な人材の確保に寄与してきたことをうかがわせる。

前期と後期の比較では、2014、2016年度においては、Figure８、10に示される通り、各項目ともに、後期が前期を少しずつ上回っているが、2015、2017年度においては、Figure９、11に示されるように、ほぼ拮抗、項目によっては、前期の評価がわずかに後期を上回る場合もある。なお、前期・後期全体でみた、「主体性・問題解決力」については、改組前後の各２年間の評価を平均してみると、2016、2017年度の平均値（3.80）と、2014、2015年度の平均値（3.69）との間に有意な差がみられた（有意水準５％）。引続き課題として注視していく必要があるものの、改組による新たな教育制度の定着の中で、「主体性・問題解決力」についても、改善・強化が図られていく可能性がある。

以上を通じて、いずれの入試区分の学生も、本学学生として望まれる能力・適性をしっかりと身につけ、卒業に至っていると同時に、改組の前後において、試験内容・方法を異にする複数の入試区分からなる本学の入学者選抜制度が、多様な人材、多様な能力・資質をもつ入学者を選抜する機能を一定程度果たしてきたと考えることができる。

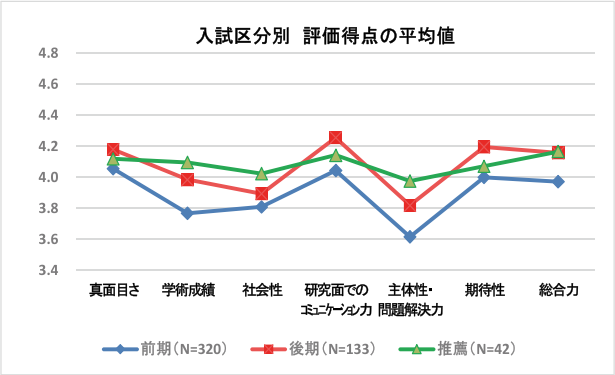

Figure８．2014年度入学者（入試区分別）の評価得点

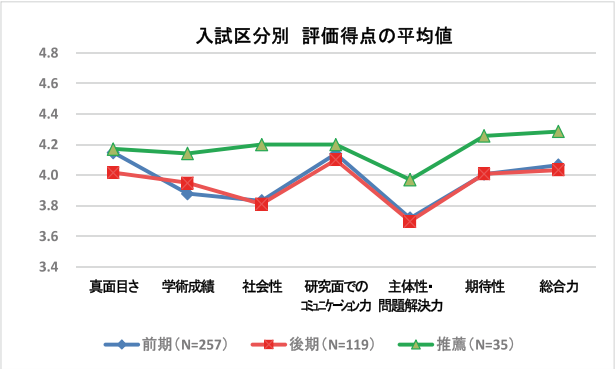

Figure９．2015年度入学者（入試区分別）の評価得点

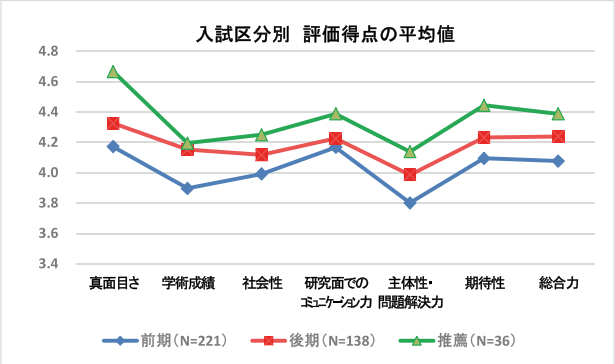

Figure10．2016年度入学者（入試区分別）の評価得点

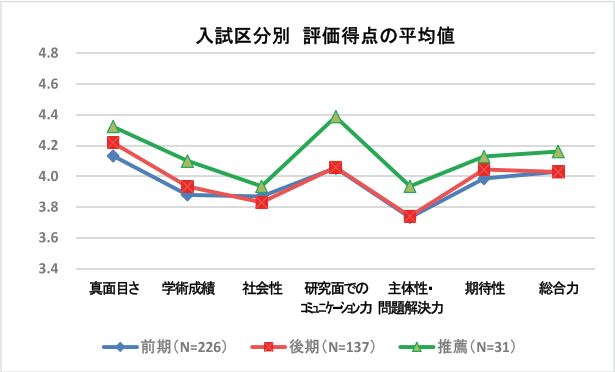

Figure11．2017年度入学者（入試区分別）の評価得点

Table10. 入試区分間における各項目の評価得点の平均値の比較（差の検定）

対象項目と比較する入試区分			2014年度入学者		2015年度入学者	
項目	入試区分①	入試区分②	評価得点の平均値の差（入試区分①－入試区分②）	p値	評価得点の平均値の差（入試区分①－入試区分②）	p値
真面目さ	推薦	前期	0.06	0.912	0.02	0.990
	推薦	後期	−0.06	0.927	0.15	0.681
	後期	前期	0.12	0.402	−0.13	0.437
学術成績	推薦	前期	0.33	0.110	0.26	0.278
	推薦	後期	0.11	0.803	0.19	0.545
	後期	前期	0.22	0.087	0.07	0.786
社会性	推薦	前期	0.21	0.266	0.37	0.043*
	推薦	後期	0.13	0.659	0.39	0.046*
	後期	前期	0.09	0.588	−0.02	0.975
研究面でのコミュニケーション力	推薦	前期	0.10	0.777	0.06	0.920
	推薦	後期	−0.11	0.755	0.10	0.818
	後期	前期	0.21	0.057	−0.04	0.910
主体性・問題解決力	推薦	前期	0.36	0.068	0.25	0.345
	推薦	後期	0.16	0.643	0.27	0.331
	後期	前期	0.20	0.113	−0.02	0.978
期待性	推薦	前期	0.07	0.870	0.25	0.271
	推薦	後期	−0.12	0.698	0.25	0.320
	後期	前期	0.20	0.075	0.00	1.000
総合力	推薦	前期	0.19	0.391	0.22	0.351
	推薦	後期	0.01	0.998	0.25	0.298
	後期	前期	0.19	0.116	−0.03	0.941

＊赤字は 5%水準で有意

対象項目と比較する入試区分			2016年度入学者		2017年度入学者	
項目	入試区分①	入試区分②	評価得点の平均値の差（入試区分①－入試区分②）	p値	評価得点の平均値の差（入試区分①－入試区分②）	p値
真面目さ	推薦	前期	0.49	0.004*	0.19	0.475
	推薦	後期	0.34	0.089	0.10	0.812
	後期	前期	0.15	0.227	0.09	0.620
学術成績	推薦	前期	0.30	0.131	0.22	0.392
	推薦	後期	0.04	0.963	0.17	0.608
	後期	前期	0.26	0.017*	0.05	0.834
社会性	推薦	前期	0.26	0.180	0.07	0.906
	推薦	後期	0.13	0.660	0.10	0.792
	後期	前期	0.13	0.327	−0.04	0.897
研究面でのコミュニケーション力	推薦	前期	0.22	0.291	0.33	0.092
	推薦	後期	0.17	0.501	0.33	0.119
	後期	前期	0.05	0.844	0.01	0.998
主体性・問題解決力	推薦	前期	0.34	0.109	0.20	0.492
	推薦	後期	0.15	0.653	0.19	0.543
	後期	前期	0.18	0.162	0.01	0.997
期待性	推薦	前期	0.35	0.048*	0.14	0.627
	推薦	後期	0.21	0.351	0.08	0.857
	後期	前期	0.14	0.275	0.06	0.789
総合力	推薦	前期	0.31	0.086	0.13	0.680
	推薦	後期	0.15	0.590	0.13	0.681
	後期	前期	0.16	0.161	0.00	1.000

＊赤字は 5%水準で有意

4．まとめ

本稿では、最新の調査である2017年度入学者に関する学生評価アンケートの調査結果を報告するとともに、第３期中期目標・計画期間の最終年度に際して、前稿報告を発展させて、改組前後の４年間の調査結果を総合的に比較分析した。これを通じて、改組前後における学生の特性や課題を考察し、本学の入学者選抜が多様な学生確保に機能してきた状況を明らかにした。

アンケート調査の結果は、各項目ともに評価の平均が概ね4.0前後の水準にあり、５（最も肯定的な評価）、もしくは４（５に次ぐ肯定的評価）の評価を得た学生が多い。特に、改組初年度の2016年度は、いずれの項目においても、他の年度の評価を上回った。

項目別では、各年度を通して、「真面目さ」と「研究面でのコミュニケーション力」の平均値が4.1 ～ 4.3近傍の水準となっており、相対的に評価が高い。また、「期待性」、「総合力」についても、総じて高めである。

改組により、学生募集の括りの多様化や、段階的・探求的に専門性を高める体制の整備が図られる一方で、改組前後を通じて、「真面目さ」、「研究面でのコミュニケーション力」、「総合力」等をしっかりと身につけ、卒業に至っていることがわかる。

一方、課題としては、「主体性・問題解決力」の評価が、改組の前後を通じて低く、各年度ともに4.0を下回っている。高大接続改革においても、課題発見・解決能力等の強化が求められており、今後の社会を担う若年世代の課題を、本学学生の中にも見出すことができる。

本学学生の強みである「真面目さ」と、課題性の大きい「主体性・問題解決力」について、改組前（2014、2015年度の平均値）と改組後（2016、2017年度の平均値）での比較も行った。「真面目さ」では、評価５と４をあわせた学生数の割合が、改組前の78.5％に対して改組後は83.5％と、上昇している。「主体性・問題解決力」は、評価５と４をあわせた割合が、改組前の60.7％に対して改組後は66.3％となった。割合としては改善しているものの、課題性をうかがわせる水準に止まっている。

学科別、類別の比較分析からは、改組前は、年度により、項目により、学科ごとの平均値の大小関係が入れ替わる場合が少なくないのに対して、改組後では、類間の平均値の大小関係に、緩やかな傾向がみられる。もっとも、有意な差が認められるケースは限られる。

「主体性・問題解決力」については、2015年度にＪ学科とＳ学科の間において、また、2017年度にⅡ類とⅢ類の間において、有意な差がみられる（有意水準５％）。

「主体性・問題解決力」は、本学学生全体の課題であるとともに、所属ごとの差が拡大しないかにも注視していく必要がある。

入試区分別の比較では、推薦入学者の評価が、多くの項目で一般入試による入学者の評価を上回った。調査対象者を標準修業年限（４年間）での卒業者に限定していることに伴う分析の限界には留意を要するものの、学業成績以外の、大学での学修や社会での活躍の基礎をなす

幅広い能力や資質において、推薦入学者が、前期、後期の入学者に勝るとも劣らない評価を得ており、多様な学生確保の面で、推薦入試が一般入試とは異なる役割を果たしてきたことを再確認することができた。

各大学の入学者選抜への期待が高まる中で、引き続き個別試験の改善に向けて不断の取組みが必要であるものの、これまでも、改組前後を通じて、本学の入学者選抜が、多様な能力・資質をもつ学生の確保に機能してきたものと考えられる。

今後とも、当該アンケート調査をはじめとして追跡調査の充実を図り、本学入学者選抜の更なる改善と高大接続改革への対応を進めたい。

謝辞

学生評価アンケート調査の実施にあたり、研究指導教員の先生方、研究科長、各専攻長、各専攻事務室のご担当者、関係部局の皆様に多大なご協力を賜りました。

新型コロナウイルス感染症の影響が長引く中にもかかわらず、多数のご回答をいただきました。深く感謝し、御礼申し上げます。

参考文献

[1] 文部科学省：「大学入試のあり方に関する検討会議提言」，2021年

[2] 文部科学省：「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議 審議のまとめ」，2021年

[3] 松尾太加志：「入学試験では何を測定しているのか」『IDE現代の高等教育』IDE大学協会，No.632，pp.34-37，2021年

[4] 井ノ上憲司，山下仁司，大友弘子，川嶋太津夫「多面的・総合的入学者選抜の効果検証―卒業年度追跡調査の分析から―」令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第16回）研究発表予稿集（オープンセッション用），pp.162-167，2021年

[5] 山路浩夫，湯山加奈子，三宅貴也，中村裕樹，和田光司：「高大接続改革の現状と卒業研究指導教員への卒業時の学生評価アンケート調査について」，電気通信大学紀要第33巻第1号，pp.18-25，2021年